



本日はよくお参り下さいました

北風すきぶ季節となりました。当たり前過ぎてきた一年が終わるこのひと月はいつもあつという間に過ぎてしまいます。最近とある雑誌での宇宙飛行士の山崎直子さんの対談を読みました。「宇宙から地球に戻ってきてフラフラしながら地面に降り立った時、風が吹いて草や木の香りが漂ってきた。それを嗅いだ時に、普段見慣れている日常の景色がとても有難いと思った。それまで当たり前だと思っていた世界が、決して当たり前ではないんだと。」すると私の頭の中に、一つの思い出が浮かびました。それは昔学生のとき、オーストラリアで、ウルルという周囲約9km 高さ300m程の原住民アボリジニが聖地と崇める一枚岩を訪れたとき、不思議な形をした岩や見たことのない景色を見て、自分の存在の小ささと大地の広さに衝撃を受け、「もっと謙虚に生きよう」と思ったことです。謙虚であることは当たり前のことですが、心から大切と思えるようになったという意味で、私事で恐縮ですが、山崎さんのお話に、自然と自分の経験が重なりました。皆さまにとって、来る平成28年が、輝かしく素晴らしい年になりますよう、心よりお祈り申し上げます。今年も一年間有難うございました。権禰宜 道子



新しい年を
寿ぎましょう。

12月

1日・15日 月次祭(つきなみさい)皇室の永遠と国家の発展、氏子・崇敬者並びに社会の安定と平和を祈ります。

5日 久里浜天神社酉の市 大鳥神社の神札が付いたカッコメ(初穂料1000円)、神棚用おふだ一式(初穂料3000円)の授与が始まります。久里浜の天神さまでは、なぜ酉の日にやらないのか?と聞かれることもしばしばありますが、酉の市に華を添えてくれる熊手屋さんやだるま屋さん、各地域の神社を回っているため、日取りを固定して曜日に関係なく毎年12月5日に行っています。(夜九時頃まで)

7日 大雪(たいせつ) 時節の上で冬が始まる日。

22日 冬至 一年のうちで最も日照時間の短い日。ゆず湯に入ると無病息災であると言われる。

23日 天長祭(てんちょうさい)

天皇陛下のお誕生日に際して行われるお祭りです。奉祝の意を表すと共に、陛下の長寿と益々のご健康を祈るお祭りです。

31日 大祓(おおはらえ) 大祓は、我々日本人の伝統的な考え方に基づくもので、常に清らかな気持ちで日々の生活にいそむよう、自らの心身の穢れ、そのほか、災厄の原因となる諸々の罪・過ちを祓い清めることを目的としています。大祓は6月と12月の年二回行われ、12月の大祓は年越の祓とも呼ばれ、新たな年を迎えるために心身を清める祓いです。



一月号は
お休みと
なります

天神さまの豆知識

皇室のまつり

今日、天皇陛下は日本国の象徴として数々の公務を行っておられますが、陛下の最も重要なお務めは祭祀を執り行われることです。▼その起源は古く歴代の天皇は、まつりを何よりも大切にし、実践してこられました。そして、今日も宮中において厳格に祭祀が行われています。▼お祭りは、大祭 小祭とその他の祭祀に区分されます。大祭は陛下ご自身が告げ文(天皇が神々に対して告げることば)を記した文を奏上されるお祭り(小祭)は掌典長・皇室の祭祀を司る部署の長が奉仕し、陛下が「拝礼」になるお祭りです。

●一月の主なお祭りご紹介

- 四方拝(元日) 元日早朝に天皇陛下が神嘉殿(しんかでん)において伊勢の神宮、山陵及び四方の神々を遙かに拝礼される儀式。
- 歳旦祭(元日) 四方拝に続いて早朝に宮中三殿で行われる年頭にあたり国民の安寧と国家の隆昌を祈られる。(小祭)
- 元始祭(三日) 宮中三殿で年頭にあたり天皇の御位の始まりと由来を祝し、国民の安寧と国家の隆昌を祈られる。(大祭)

● 昭和天皇祭 七日 昭和天皇の崩御された日に皇霊殿と武蔵野

御陵(東京都八王子市)で行われる。2日は一般参賀です

(大祭) 参考文獻 『氏子のしおり』第五八号神社本庁発行



お祭り歳時記

赤穂大石神社義士祭(十二月十四日)

主君への忠誠を誓った家臣として知られる四十七人の赤穂義士。そのお話は「忠臣蔵」として、これまで様々なドラマや舞台として演じられ、忠義を尽くし、潔く散った江戸時代の義士として多くの人の共感を呼んでいます。兵庫県の赤穂大石神社は、大石内蔵助屋敷跡に建つ神社です。主君の仇であった吉良氏を討ち取るという赤穂事件の発生した十二月十四日には、赤穂義士を追慕し義士祭が行われます。他にも東京は泉岳寺など、全国で赤穂義士祭が開催されます。

今月の言葉

『雨風も紅葉も月雪も』

どれも神の姿なりけり

(浄蓮院行存)

「修験道諸神勸請通用」より

雨と風は、なれば困るが、時には人には厳しい。木の葉が色づく艶やかさ、月の柔らかな輝き。純白の雪の美しさと共にある豪雪の恐怖。あらゆる自然は厳格さと美を放つ。すべて神から授けられたものである。自然は神そのものだ。美しくありながら、人の思うようにならない厳しさを、神であり、自然の姿である。厳しくあるがこそ美しく、美しいからこそ厳しい。それが神道の国、日本の美観である。参考文獻『神道のことば』武光誠監修 河出書房新社